

Jリーグ選手を最終的にイングランドプレミアリーグに ステップアップさせるための最初の海外移籍に関する研究

トップスポーツマネジメントコース

5013A314-3 栗山 貴行

研究指導教員：平田 竹男 教授

1. 背景

サッカーの男子日本代表は、5大会連続でFIFAワールドカップの出場権を獲得した。2010年南アフリカ大会では、自国開催以外で初めてグループリーグを勝ち抜き、2012年五輪では4位となるなど、日本代表は国際大会において躍進を見せている。

1995年12月に欧州司法裁判所で出されたボスマン判決以降、欧州におけるサッカー選手の移籍が活発化している。日本人選手の海外移籍も、1998年から増加し始め、2010年ワールドカップ南アフリカ大会以降、飛躍的に増加しており、現在では、日本代表の選手の過半数が海外リーグに所属する状況になっている。

移籍制度に関し、上記ボスマン判決では、①EU加盟国籍のプロサッカー選手は、所属したクラブとの契約期間満了後はEU域内の他クラブチームへの移籍は自由であること、②EU域内のクラブチームではEU加盟国籍を持つ選手は外国籍扱いされないこと、が示された。ボスマン判決以降、クラブチームは、所属選手と複数年契約を締結するようになり、契約期間満了前の移籍には移籍金（違約金）が発生する仕組みとなっている。また、FIFA規則において、選手が移籍した場合、移籍金の5%が、その選手が12歳から23歳までの間に所属したチームに、所属年数に応じて分配されることとされている。

世界的なサッカー選手の移籍の活発化に伴い、代理人の役割も重要性を増しており、代理人の手腕や戦略が、移籍の成否を左右する状況が生じている。

このような状況下で、日本人サッカー選手の一層の強化のためには、より多くの選手を最高レベルのリーグに移籍させることが有効な方法と考えられる。

しかしながら、これまで欧州のサッカーリーグのレベルについて、所属選手及び所属チームの実力の双方の観点から比較をしたデータは存在しない。また、その欧州のリーグの中で最もレベルが高いリーグを見極めた上で、Jリーグ選手が、最終的に当該

リーグへステップアップするために、どのような海外移籍ルートが効果的であるかについても詳細なデータはない。

2. 目的

本研究の目的は、より多くの日本人選手が、欧州において最もレベルの高いリーグでプレーする状況を実現するために、いずれのリーグを最初の海外移籍先とすべきかを明らかにすることにある。

3. 研究手法

1) 欧州各国のサッカーリーグのレベルに関する現状分析

【対象】

文献及びWEB情報を対象とした。

【方法】

下記③項目を調査し、所属選手及び所属リーグの双方からリーグレベルを分析した。

- ① FIFAワールドカップ及びUEFA欧州選手権の過去3大会に出場した国の選手が、各大会の時点で所属していたリーグと各リーグの人数
- ② UEFAが、チャンピオンズリーグ等UEFA主催大会への出場チーム数を決定するために用いているUEFAリーグランキングの過去5シーズンの推移
- ③ UEFAチャンピオンズリーグにおける過去10大会で、ベスト16以上の成績を残したチームの所属リーグ

2) 移籍ルートに関する文献調査

【対象】

研究1において、欧州において最もレベルが高いと考えられたリーグについて、当該国以外の選手、特に欧州以外の国籍の選手が移籍するルートについて、以下のとおり文献調査等を行った。

【方法】

下記、4項目について調査した。

- ① 過去に当該リーグのチームに所属した経験のある日本人選手の経歴
- ② 過去 10 年間に、他の欧州リーグから、当該リーグへ移籍した選手が、移籍直前に所属していたリーグ
- ③ 欧州以外の国籍の選手のみを抽出し、移籍選手数、移籍時の年齢等の調査
- ④ 欧州各リーグの過去 10 年間の移籍金収支

4. 結果

1) 欧州各国のサッカーリーグのレベルに関する現状分析

FIFA ワールドカップ過去 3 大会全てにおいて、出場国の登録選手の所属リーグは、イングランドプレミアリーグ（以下「プレミアリーグ」という。）の選手が最多であった。また、ベスト 16 進出チームに限定した調査においても、3 大会全てでプレミアリーグ所属選手が最多であった。

UEFA 欧州選手権出場国の登録選手は、2004 年及び 2012 年大会ではプレミアリーグ所属選手が最多、2008 年大会では、イングランド代表は本大会不出場にも関わらず、プレミアリーグ所属選手数が第 2 位であった。

UEFA リーグランキングは、2013 年は、スペインが 1 位、イングランドが 2 位であったが、2012 年以前は、プレミアリーグが継続的に 1 位を獲得していたとの結果が出た

UEFA チャンピオンズリーグ過去 10 大会の結果に基づく得点を集計した結果、イングランドが 84 点を獲得し、2 位のスペイン（62 点）に大差をつけての 1 位だった。

以上より、欧州において所属選手及び所属チームいずれのレベルも最高位にある最もレベルの高いリーグは、プレミアリーグであることがわかった。

2) プレミアリーグへの移籍ルート

過去、プレミアリーグに所属した経験のある日本人選手が移籍直前に所属していたリーグは、J リーグが 3 名、日本の高校が 1 名、ドイツ、イタリア、オランダ、スペインが各 1 名であった。移籍時の平均年齢は、全体平均が 25.17 歳であり、うち日本から直接移籍が 25.33 歳、他国リーグ経由が 25 歳と、他国リーグ経由の方が若かった。

プレミアリーグに移籍した選手が移籍前に所属していたリーグは、連合王国に属するスコットランド、ウェールズを除くと、フランス（10 年間合計で 249 名）、スペイン（同 224 名）、ドイツ（146 名）、アイルランド（145 名）、オランダ（130 名）及びイタリア（129 名）の順であった。

欧州以外国籍の選手のみを抽出した調査では、フランス（83 名）、スコットランド（36 名）、スペイ

順となった。全移籍選手に占める欧州以外国籍の選手の割合は、フランス（33.3%）、ベルギー（25%）ドイツ・オランダ（19.2%）、イタリア（17.1%）の順であった。ただし、フランスからの移籍の 9 割はアフリカ国籍の選手であった。

プレミアリーグに移籍した選手の移籍時の平均年齢は、スペインからの移籍が最も高く（27.06 歳）、オランダからの移籍が最も低い（24.48 歳）ことがわかった。また、プレミアリーグに移籍するまでの平均在籍年数は、イタリアが最も長く（4.54 年）、オランダが最も短い（3.42 年）ことがわかった。

過去 10 シーズンの移籍金収支は、オランダが最大の利益を上げており（364,232,000 ポンド）、スペインが最大の損失を計上していた（-902,085,360 ポンド）。オランダは、1 シーズンごとの収支でも、全て黒字であった。

5. 考察

世界最高峰のサッカーリーグである、プレミアリーグに移籍する際のルートとしては、日本から直接よりも、欧州の他のリーグを経由する方が効率的といえることがわかった。そして、ベルギー、オランダ、ドイツの各リーグからの移籍には、欧州以外の選手が多く含まれており、日本選手が経由するリーグとして有効である。

その中でも、プレミアリーグへの移籍時の平均年齢は、オランダからの移籍が最も低いことに加え、オランダが移籍金収支で最大の利益を出していることから、オランダの選手の育成力が高いことが推察される。また、過去にオランダリーグに移籍した日本人は、移籍初年度から所属チームのリーグ戦の 81.86%の試合に出場しており、オランダリーグは、日本人選手が出場機会にも恵まれやすいリーグといえる。以上から、日本人選手の移籍先として、オランダリーグは好適である。

さらに、オランダリーグが高く移籍させることに長けていることに着目し、FIFA ルールに基づく育成貢献金制度や、移籍先チームから再度他のチームに移籍した際に発生した移籍金の一部を元所属チームに還元する契約条項の活用により、J リーグチームや高校、ユース等少年指導組織にも金銭的利益をもたらすことが可能であることも確認できた。

以上より、将来有望な若手選手をより若い時期にプレミアリーグに移籍させる際のルートとしては、オランダリーグ経由が最適であることがわかった。

また、この研究結果は、EU 以外、特にアジア諸国の選手の移籍戦略にも応用可能と考えられる。

6. 結論

プレミアリーグにより多くの J リーグ選手を移籍させるためには、オランダを最初の海外移籍先と